

大住南塚古墳発掘調査概報

(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第6集)



1986

田辺町教育委員会

序

田辺町内には数多くの古墳がありますが、大住地域には2つの大きな古墳が並んでいます。北側のものが大住車塚古墳（チコンジ山）で、南側が今回調査をしました大住南塚古墳です。ともに南山城地域を代表する古墳で、古くから知られています。大住車塚古墳については前方後方墳という形や保存状態の良さから昭和49年に国の史跡指定を受けました。

今回の調査は大住南塚古墳の規模などを確認する調査で、その結果、これまで前方後方円墳といわれていたわけですが、前方後方墳の可能性が高くなり、そのことに驚いたのは、私たち関係者ばかりではないと思います。

最後になりましたが、調査を快諾していただきました土地所有者の方たちをはじめ、種々ご指導いただきました関係者各位、嚴寒の中調査に従事された方がたに心よりお礼申しあげます。

昭和61年3月

田辺町教育委員会

教育長 吉山勝平

例　　言

1. 本書は、昭和60年度国庫補助事業として田辺町教育委員会が実施した大住南塚古墳発掘調査の概要報告である。
2. 現地調査は昭和61年1月8日に開始し3月26日に終了した。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体……田辺町教育委員会教育長 吉山勝平

調査指導……京都府教育府指導部文化財保護課

調査担当者……田辺町教育委員会社会教育課 鷹野一太郎

調査事務局……田辺町教育委員会社会教育課（課長 加藤晴男）

調査補助員……横田明・山田温久・岩崎信・青代智・岡山努

4. 調査に際し、次の土地所有者の方たちに多大なるご協力をいただいた。（敬称略）

大字大住小字八王寺34 藤田伊三郎

大字大住小字八王寺37 大久保泰男

大字大住小字八王寺37-1 大林 清一

大字大住小字八王寺38 小田太喜男

大字大住小字八王寺40 岩本 俊彦

5. 現地調査ならびに本書の作製に当たり、次の機関ならびに諸氏から多大なる指導協力を受けた。記して感謝の意をします。（敬称略・順不同）

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

小野忠熙・堤圭三郎・中谷雅治・高橋美久二・半良泰久・奥村清一郎

磯野浩光・川西宏幸・橋本清一・辻本和美・石井清司

6. 本書の編集および執筆・監修・写真撮影は鷹野が行った。（表紙を除く）

1 はじめに

大住南塚古墳は、京都府綴喜郡田辺町大字大住小字八王寺35番地ほかに所在する。

北に並置する大住車塚古墳（チコンジ山）とともに低台地上に立地し、周濠を有する古墳時代中期の大型古墳として学術的に貴重な資料としてばかりでなく、生きた教材として広く町民に親しまれている。

この大住南塚古墳は、埴丘の傾形がかなり描かれており、ことに前方部側は顕著であるが、このことは
かなり以前からだったようである。梅原末治氏の発表や龍谷大学学生諸氏の測量調査等によると、西北面
^{注1)}
^{注2)}する前方後円墳で、埴丘の周囲に同一水面の盾形周濠を巡らし、同一水面にするために地形の低い北側に
外堤を高く築いているとされ、葺石の存在は認められるものの埴輪については不明であった。主体部は堅
穴式石室であったが、明治年間に破壊され、その際石製品・刀剣が出土したことが伝わっている。また、
北側周濠の一部は、現在も溜池として利用されている。

一方の大住車塚古墳は、西北に面した前方後方墳で、全長約66m・前方部幅約18m・同高さ約1.5m、後方部一辺約30m・同高さ約4.5mの規模をもつ。周囲の水田畦畔から周濠の存在が考えられる。周濠は長方形を呈し、その幅は後方部後方・前方部前面で約15m、後方部側面で約13mを測る。主体部については、未発掘のため詳細不明であるが、竪穴式石室ないし粘土椁が考えられる。

今回の調査は、大住南塚古墳の墳丘等の規模、埴輪の有無等を確認し、保存のための基礎資料作成のため行った。歴史の中、献身的に作業に従事した諸氏に心より感謝したい。



調査地位置図 (S-1 : 10000)

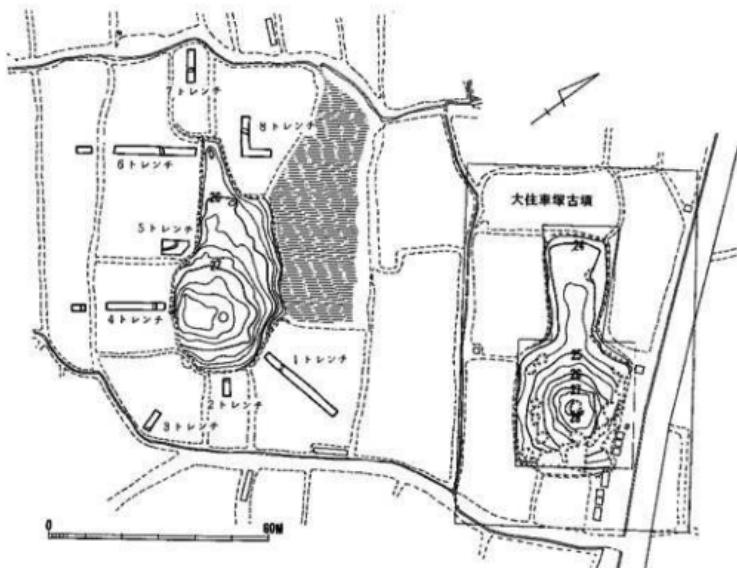
2 調査概要

大住南塚古墳は測量調査によれば、全長65m、後円部径36m、前方部の幅はくびれ部で17.5m、先端で18ないし25mを測り、周濠は前方部前面および後円部後方で19m、後円部側面で17mの幅をもつものとされている。ただ、測量調査以前から墳丘の周囲は崖状を呈し、ことに前方部においてはかなり破壊を受けていた。

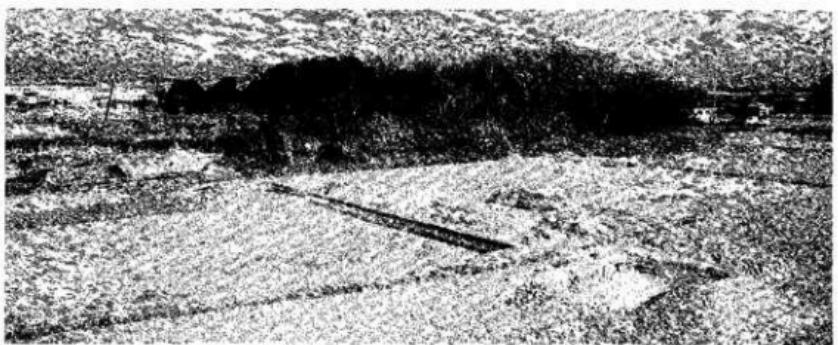
前方後円墳であるという過去の調査、「南山城の前方後円墳」掲載の復元想定図などをもとに、墳丘規模・周濠の規模・埴輪の存在等を確認するため、墳丘周囲に8ヶ所のトレンチを設定し調査を開始した。

トレンチはいずれも現在水田および畠として耕作されている部分であり、現状復旧のため調査はすべて人力で行った。

1・2・4・5トレンチにおいて、現在の墳丘裾より3~7m外方で、葺石・斜面を検出した。1トレンチでは、周濠底から20cm程上の地山上に葺かれた人頭大の基底石とその上に3段程度の挙人の葺石の存在が確認された。ところで、このトレンチの中央付近で、外堤の検出を予想したが、痕跡すら検出されず外堤はトレンチ東端よりも東方になることが判明し、盾形といわれている周濠形態に疑問を与えた。2・4トレンチでは葺石は滑落しており、地山傾斜面の下場を墳丘裾と考えた。5トレンチはくびれ部検出目標としたが、はたしてそのとおりとなった。想定では、直線とゆるい弧の組みあわせであったが、検出されたのは前方部とみられる直線的な列石と後円部というよりは後方部といえるような直線的な列石であ



トレンチ配置図（『南山城の前方後円墳』掲載図に加筆再トレース）

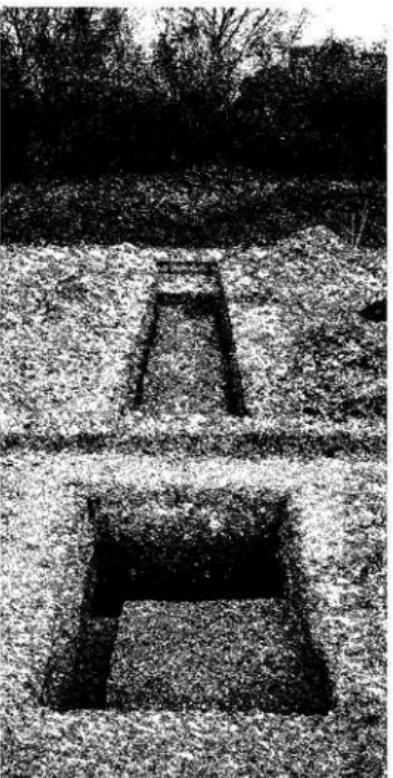


大住南塚古墳全景（左奥に大住車塚古墳がみえる 西から）

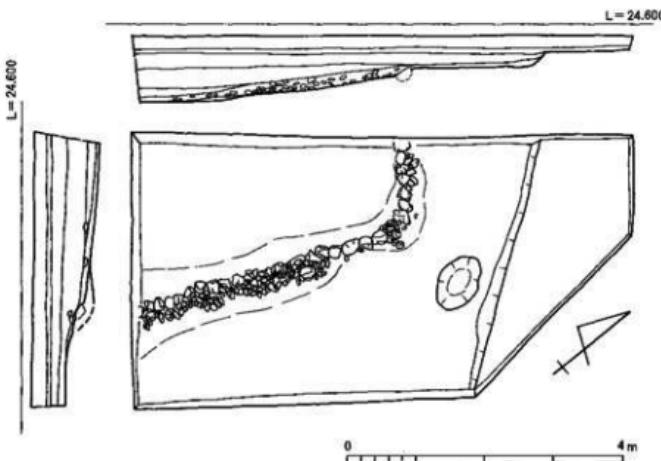
った。2直線のなす角は約100°である。葺石は、地山を整形しその上に若干の盛土を施した上に、人頭大の基底石・挙大の石（砂岩・チャートを主体）であつた。これらより一辺37mの後方部が想定できる。

6・8トレンチは前方部の様子をつかむためのものであったが、それぞれ葺石は滑落していたものの傾斜面をとらえることができた。これによりかなり先端部の幅の広い前方部であることがわかった。また8トレンチで滑落していた葺石はいずれも人頭大程の大きさで、この付近には大きめの石のみを使用していたことがわかる（石材は頁岩・ホルンフェンスが主体）。以上により全長は71mを測る。

各トレンチ周濠部分の層位は基本的に耕作土・黄色粘土（床土）・灰色系砂質土（整地層とみられる）・黒色土（有機質含む）・黒色シルト層・地山（青灰色砂質土）の順である。かつては常時滲水していたとみられるが濠底の絶対高は3グループに分かれる。1・8トレンチで22.7m、2・7トレンチで23.2m、その他は23.5m程で、現在の池の水面が23.2mであることなどを考えあわせると、同一水面であった可能性は低く、築堤により2段程度の水面があったものとみられる。周濠底の幅は14~16mを測る。



4トレンチ全景（南西から）



5 トレンチ実測図

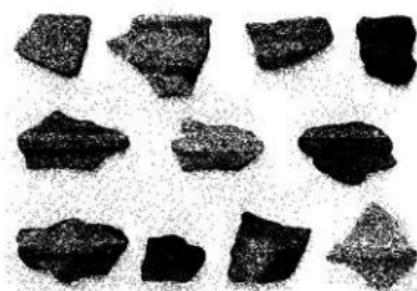
3 出土遺物

出土遺物には、埴輪・土師器・須恵器・瓦器・瓦・陶器・古鏡などがある。整理箱につめて10箱であり、このうち埴輪は4箱である。時代的には古墳時代から近世のものまである。

注4) 墓輪には朝顔形・円筒・家形があり、楕円筒の含まれる可能性が高い。朝顔形のものには、肩部が厚手のものと薄手で細いタガのものの2種がある。透し孔には円形・方形のものがあり、逆三角形・半円形のもの的存在の可能性もある。調整では内面にヘラケズリのあるものが認められる。

4 まとめ

今回の調査で確認できたことを列挙しておく。



出土遺物 右下が家形埴輪

墳丘は従来いわれていた前方後円墳でなく前方後方墳の可能性が高く、とすればこの大住地域に2基の大型前方後方墳が並んで存在するという他に例のない貴重な資料となろう。その規模は、確認した墳丘幅で測ると約71mで、後方部一辺約37mである。またくびれ部は通常の鋭角でなくやや鈍角を呈する。

葺石は近くの丘陵から運ばれた石を使用しているが、5トレンチで検出した葺石の基底石中に1点ではあるが、主体部の堅穴式石室



5 トレンチ（左側に朝顔形埴輪脣部の逆転したもの 北西から）

の石材として使用されたのと同じ安山岩が用いられている。

埴輪はその存在が確認された。またそれらは、川西編年のII期に相当し、このことにより、この大住南塚古墳の築造年代を古墳時代前期4世紀後半に置くことができる。

周濠は同一水面にならずに段をもつものと推定される。周濠底部からの遺物の出土ではなく、整地層とみられる土より瓦器碗が出土していることから、14世紀頃までは周濠としての機能をもち、それ以降に水田化されたが、一部は現在も溜池となっている。規模および形態は推定であるが、100m×80mの長方形のものとみられる。深さは、現在の水田面を当時の水面としても1m程度であり、比較的浅いものといえる。

外堤は地形の低い北側部分ではその存在が推定できるものの、他の部分については今回の調査からは不明のままである。

以上概要を記したが、今回の調査による事実の提供は、古墳研究の上で貴重な資料となり得るであろうし、当時の社会情勢や墳形のこと、被葬者の問題等今後に残された課題が多い。

注1) 梅原末治「大住村車塚古墳」(『京都府史蹟勝跡調査会報告』3 京都府 大正11年)

注2) 奥村清一郎「大住南塚古墳」(『南山城の前方後円墳』 龍谷大学考古学資料室 昭和47年)

注3) 真石石材については京都府立山城郷土資料館橋本清一氏のご教示による。

注4) 墓輪については平安博物館川西宏幸氏のご教示による。

昭和61年3月29日 印刷
昭和61年3月31日 発行

大住南塚古墳発掘調査概報
(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第6集)

編集・発行 田辺町教育委員会

〒610-03 京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字丸山214番地
電話 07746-2-2552

印 刷 明新印刷株式会社

〒630 奈良市橿本町36番地
電話 0742-23-3131